＜原　著＞

特別支援学校用教科書『くらしに役立つ　社会』の分析（Ⅳ）：研究総括―学習困難の研究（５）

池野　範男 *・岡田　了祐 *・宛　　彪 **・渡邉　　巧 **
若原　崇史 ***・横山　千夏 ****・能見　一修 *****

本研究の意図することは，“誰もがわかる，誰もが学ぶことができる”という本来の教育の理念を取り戻すことで，特別支援教育と教科教育の間に作られていた溝を埋めること，また，これらの教育相互において本来教育が持っている理念を実現することである。そして，それによって学校教育総体を新たに創造することを目指すことである。本研究は，学習困難の概念を用い，社会科教育（の教授や学習）において妨げていることを手がかりに，理念を実現する状態を作りだすことを追究しようとするものである。

第１稿で，学習困難を生み出す要因を仮説として提出し，その妥当性を特別支援学校・小学校・中学校社会科学習指導要領および“特別支援学校”用教科書と“通常”学校用社会科教科書を比較することによって検討した。また，第２稿では特別支援学校，通常学校双方の学習指導要領と教科書の全体比較と地理的内容を，第３稿で歴史的内容を，第４稿で公民的内容を比較考察した。第５稿の本稿では，これまでの研究を総括し，研究の目的，仮説，その結果を総括・考察し，仮説に対する結論を提示した。

結論としては，①特別支援学校用社会科教科書は教育や社会科の考えにもとづき，学問よりも生活との関連，生徒が社会において行き抜くために役立つこと，生徒と社会との関わりを内容選択・配列，また教授・学習の重点として採用し，②学習困難を社会（地理，歴史，公民）の学習に対する生徒の困難と考え，③とりわけ，社会生活との関連を重視し，学習困難を極力生みださない配慮をしていることを示した。これらの配慮を，４つの仮説との関連では，情報処理の容易性，情報の特定的な見えへの限定という決断性，動き，動作，行為を伴う行為随伴性によって学習困難を乗り切り，社会の学習が社会との関わりとして成果を生み出すものとして設計している，というものであった。この結論から引き出せることは，特別支援学校用社会科教科書は社会の学習に関して，社会生活との関わりによって従来の通常学校用社会科教科書が含み持つ社会の学習において生ずる学習困難を避け，一人ひとりの生徒が学び取るものを確保している，ということである。

キーワード：特別支援教育，教科教育，社会科教科書，学習困難，手立てと支援

Ⅰ．本研究の目的と仮説

１．研究の目的

一連の本研究の目的は特別支援教育の考えから教科の授業の在り方を再考することであり，特別支援教育と教科教育の関係を問うことにある。特別支援教育はつまずき，困難，障害にはどの子も出会うものであり，それらを教育のなかに含み，それにもとづき，教育を進めるという考えを持っている。本研究は，この特別支援教育の考えを研究の視点にし，教科の教育を再検討・再考することを目指すものである。

本研究の基本発想は，特別支援教育の本質と理念にもとづくことにより，すべての子どもたちに，その学びを保障し，だれもがわかる授業，だれもが学びのある授業が実現できるのではないか，というものである。また，教科の教育と授業もこの特別支援教育の本質と理念を受け入れ，推し進めることが必要であるというのが本研究の出発点であった。

* 広島大学大学院教育学研究科社会認識教育学講座
** 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期文化教育開発専攻社会認識教育学専修
*** 三原市立第三中学校，前広島大学大学院教育学研究科博士課程前期科学文化教育専攻社会認識教育学専修
**** 福山暁の星女子中学・高等学校，前広島大学大学院教育学研究科博士課程前期科学文化教育専攻社会認識教育学専修
***** 前広島大学大学院教育学研究科博士課程前期科学文化教育専攻社会認識教育学専修

このような考えは，学校における教師，クラス，学習環境と個々の子どもとの関係だけではなく，さらに広く捉え，学校という社会，あるいは社会そのものと一人ひとりとの関係にも適用できる。教科の授業における誰もがわかることは，内容上で一人ひとりがわかることとともに，方法上において，教師と子ども，子ども同士における相互の協同的な関係を構築することである。特別支援教育にもとづいた教育というのものでは，一人ひとりの子どもが相互に尊敬し信頼し，学びあうこと，また，お互いが真理や真実を求め合い追究することを共有することが基盤になる。クラス内の子どもの相互の関係，グループでの関係，クラスでの関係，また学年，学校内の関係，これらの関係において，相互の尊敬，尊重，学び合いの気持ちがないと信頼も生まれないし，お互いが協力し合い追究しようとする気持ちも出てこないだろう。このことは，グループ，クラス，学校という小社会だけではなく，地域社会，国家，市民社会，国際社会，世界という大きな社会でも同様であり，そして，社会におけるインクルーシブな教育，広義のシティズンシップ教育の問題である。本研究は，このような社会におけるインクルーシブな教育という視点を併せ持って，進めることにした。

その際の視点として，学習困難を選択した。学習困難に関連する概念に，つまずき，障害がある。これらは類似しているが，主観性と客観性において異なる。両者を含み持つ概念として学習困難を選択した。学習困難を主要概念に選択した理由は，２つある。第一は，授業における教授―学習の学習に重点化して研究を進めるため，第二は，教育の発展は成功からではなく，失敗からなされるという理由からである。

さらに，教科の学習では，常に，目標－内容－方法の三角形，トライアングルがあり，内容と方法を用いて，目標を達成する。そこには，飛躍やジャンプが必要である。それは，次の Fig. 1 のようになる。

教科の学習にはこの飛躍，ジャンプ構造が内在しており，根本的に，これを乗り越える困難を抱えている。それぞれの子どもがこの目標達成をどのようにしているのか，達成できないとすれば，どのような困難がそこにはあるのか，教室，学習環境，指導，学習など，その子が学ぶことにおいて関係しているすべての面で，何が問題となっているのかを突き止め，解決することが求められているのかを究明することである。この問題を解き明かすこのような取り組みを，学習困難の研究と呼ぶことにした。教科学習の困難の研究こそが，教科教育研究の重要な課題である。一連の本研究では，（将来進める予定である）教科学習における学習困難の事例を調査するのではなく，まずは，その困難の克服方策を組み込んだ特別支援学校用社会科教科書を取り上げ，そこで想定されている社会科学習の困難とその克服策を見出し，そこにおける傾向性を解明することにした。

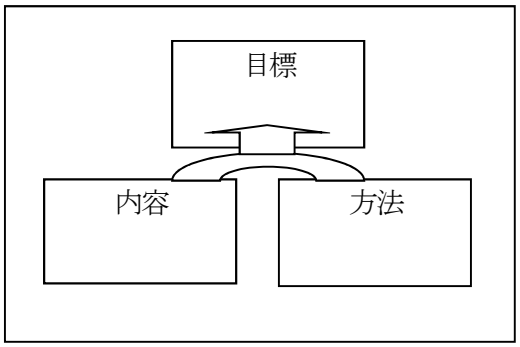

Fig. 1　教科指導の目標達成構造

２．研究の対象と分析の視点

本研究で取り上げるものは，特別支援学校高等部用教科書である『くらしに役立つ』シリーズの中の『社会』[1]（以下，本教科書と略す）である。本教科書とともに，“通常”中学校用社会科教科書を取り上げ，その全体の構成，また地理的内容，歴史的内容，公民的内容に関して，単元，頁構成を学習困難の視点から分析することとした。

分析の視点として採用したのは，学習科学研究で採用されている記号論的立場である。この記号論的立場とは，ペイビオ（Paivio）による二重符号説（理論）のことである。これは，情報はことばと同様，概念とイメージのいずれか，あるいは両方のコードに符号化され処理されるというものである。この説に基づいて，空間表象の学びに関し，シュバルツとハイザー（Daniel L. Schwarz and Julie Heiser）は，４つの特性を指摘している[2]。彼らは，「何が空間表象を意味あるものにするか」と問うことで，知覚の４つの特性が働くとしている。それらは，(1) 容易性，(2) 決断性，(3) 行為随伴性，(4) 独立性，である。これらを社会科学習の困難に関する研究の視点とし，社会のわかり方に応用し，次のように書き換え，仮説とすることにした。その仮説を再掲しておく。

(1) 容易性

社会に関する情報は，その情報をある形やイメー

ジ，ことばに統合したり構成したりすることが，容易であると，情報処理はうまくできる。

(2) 決断性
社会に関する情報は多様に与えられるが，ひとは，それを特定のものに制限し特定の見えに決定することで，確実化を図る。

(3) 行為随伴性
社会に関する情報に関して，ひとは，情報操作するとき，動作，行動を伴い行っている。

(4) 独立性
社会に関する情報は，それぞれ，独立した動作，行動によって，多様なイメージや概念を作り出すことができる。

Ⅱ．比較考察の結果と議論

１．比較考察の結果

(1) 教科書の全体構成

特別支援学校用教科書である本教科書は，第１稿（池野範男・宛彪・岡田了祐・渡邉巧・能見一修・横山千夏・若原崇史，2014）と第２・３・４稿（若原崇史・宛彪・横山千夏・渡邉巧・能見一修・岡田了祐・池野範男，2015；横山千夏・渡邉巧・能見一修・岡田了祐・若原崇史・宛彪・池野範男，2015；岡田了祐・能見一修・若原崇史・宛彪・横山千夏・渡邉巧・池野範男，2016）において，通常学校用教科書と比較した。その結果をまとめると，次のようになる。

本教科書は，
①内容選択を，「くらしや社会に生きる」ことに置いている。
②内容配列を，生活や社会における直接的な自立から間接的なものへと配列している。
③普段の生活としてくらすことそれ自体の保証が目的になっている。

通常学校用社会科教科書は，
①内容選択を，日本国民として必要な知識や技能の習得に置いている。
②内容配列を，国民として必要な情報から，国家が必要とする情報へと配列している。
③普段の生活としてくらすことそれ自体の保証は，すでにできていることを前提にし，そのうえでの社会の学習（実質，国家の学習）を行っている。

(2) 内容の比較分析

全体構成の比較結果は，各単元に当たる章，あるいは，見開きを，通常学校用社会科教科書と比較検討することによって検証した。その方法は，まずは単元レベルでの構成を比較し，本教科書に見られる特性，傾向性を明確化した。次に，小単元，見開きレベルでの構成を比較し，本教科書が想定する学習困難を抽出し，その学習困難について第１稿で示した仮説の「知覚の四つの特性」を用いて理論的に説明することを試みた。それらを踏まえた上で，本教科書に見られる学習困難への対応の論理（手立てや支援）を究明した。その究明を，地理的内容（第２稿），歴史的内容（第３稿），公民的内容（第４稿）に分けて進めた。

①地理的内容の比較分析結果

第２稿（若原ら，2015）では，地理的内容に焦点を当て，“特別支援学校”用社会科教科書（『くらしに役立つ　社会』，本教科書）を“通常”学校用社会科地理教科書と比較し，研究仮説の妥当性を検討した。

単元構成の比較から３つの学習困難とその克服の手立てを見出した。第一は，学問との連関を重視した内容の学習は困難であるため，生活との関連を重視した内容を学習する。第二は，学問的に有用とされる地図の学習は困難であるため，生活にとっての有用性の観点から地図を選択し学習する。第三は，学問的に要求される知識の学習は困難であるため，実際に社会生活で生徒たちが活用できる内容を学習する。

これらを本研究の仮説から検討すると，次の３点を考察結果として導いた。１つ目は，生徒にとってイメージしやすい生活との連関を重視することで「容易性」を高めている。２つ目は，生徒が実際に使える，場合によっては使ったことがある地図を取り上げることで「行為随伴性」を高めている。３つ目は，生徒が旅行したり生活したり際に使える知識を学習することで「行為随伴性」を高めている。

小単元構成の比較考察から２つの学習困難とその克服の手立てを見出した。第一は，地域ごとで異なる見出しで学習内容をまとめることを避け，全ての地方で統一した見出しで内容をまとめる。第二は，地域的特色を学習するために必要とされる情報から追究していくことは学習困難となるため，個別具体的な情報を積み上げていくことで地域全体の特色がみえてくるようにしている。

これらを本研究の仮説から検討すると，次の２点を考察結果として明らかにした。１つ目は，形式を統一することでどの地方を学習するとしても情報を整理で

きるようにすることで「容易性」を高め，また，それぞれの見出しに書かれていることがどのような内容であるのかを生徒に見通しをもたせることで「決断性」を高めている。２つ目は，記載する情報を個別具体的なものにすることで「容易性」を高めている。

さらに，見開き構成の比較考察を行った結果，２つの学習困難とその克服の手立てを見い出した。第一は，時制が異なる内容を含む記述を理解することは学習困難となりうるため，過去の様子についての情報は地理的事象の一部として歴史の中で取り上げている。第二は，情報量の多い資料から情報を抜き出すことは困難となりうるため，情報量を最低限にし，読み取るべき情報を明確化している。

これらを本研究の仮説から検討すると，次の２点を明らかにした。１つ目は，地理的事象の中で歴史的な変遷を触れないようにすることで「容易性」を高めている。２つ目は，何を読み取ればいいのか生徒たちに意識させることで「決断性」を高めている。

以上のように第２稿では，本教科書と通常学校用社会科教科書における地理的内容の比較によって，本教科書が想定している学習困難を見出すことができた。通常学校用社会科教科書は「社会を理解する」ことを主目的にしているため，その内容は学問的な内容となっている。本教科書はそれを「社会生活者」となるための知識・技能へと変更することで「容易性」を高め，実際に使う姿が想像できる内容を取り上げることで「行為随伴性」を高めるという手立てを取っていた。そして，情報の読み取りがうまくいくようにするために特定の見えに決定するという「決断性」を高めていることも見て取れた。つまり，地理的内容についていえば，「容易性」「決断性」「行為随伴性」を高める手立てが用いられていると結論づけた。

②歴史的内容の比較分析

第３稿（横山ら，2015）は歴史的内容に焦点を当て比較考察した。考察の結果，本教科書における，特定の視点による現在と結び付けた歴史の学習と，通常社会科歴史教科書における，独立し網羅的に配列した歴史の学習という歴史学習の違いを明らかにした。通常学校用社会科歴史教科書における歴史の学習には基本的に，学習者の現在の生活と時間的な隔たりがある。その隔たりが生徒の学習において歴史的内容の抽象性を高め，学習困難を生む可能性がある。しかし，本教科書のように，歴史的内容を現在学習者が生活している場所（地理）や社会のシステム（公民）と関連付けることによって，歴史的内容の抽象性を緩和するように工夫することができる。

第３稿では，本教科書で取り扱っている歴史的内容と，通常学校用社会科歴史教科書と比較考察をした。相違は，大きく見れば，本教科書では，地理的・公民的内容と結びつけ，特徴的な時代を取り上げ，大きく歴史を眺めるようにしてあるのに対して，通常学校用社会科歴史教科書はほぼどの時代も取り上げ，歴史全体を満遍なく見通せるようにしている。

この相違には，特定の視点による現在と結び付けた歴史の学習と，独立し，網羅的に配列した歴史の学習という歴史学習の違いによっている。この点において関連する仮説は「(1) 容易性」と「(2) 決断性」である。

歴史的内容を地理的・公民的内容と関連付けることは，「(1) 容易性」の支援である。歴史的内容は基本的に学習者の現在の生活と時間的な隔たりがあり，その隔たりが歴史的内容の抽象性を高め，学習困難を生むもとになっている。しかし，本教科書のように，歴史的内容を現在学習者が生活している場所（地理）や社会のシステム（公民）と関連付けることによって，歴史的内容の抽象性を緩和できるだろう。歴史的内容を特定の視点に絞って選択することは「(2) 決断性」の支援だと考えられる。網羅的に歴史的内容を選択・配列することは，歴史的内容の量を膨大にするため，学習者がそれらを通して何を理解すればよいのかという目標を掴みにくく，歴史的内容それ自体を受け止めることに終始してしまう可能性がある。膨大な歴史的内容を受け止めきれないという困難が生じる可能性もある。本教科書のように，歴史的内容の学習に特定の視点を与えることは，歴史的内容を通して何を学べばよいのかということを明確にし，そういった学習困難を克服すると考えられる。本教科書では，歴史学習において一つの時期を特定の視点に絞って内容を選択することや重要な内容を繰り返し記述することは，「(1) 容易性」と「(2) 決断性」に対する支援であると考えるのである。

③公民的内容の比較分析

第４稿（岡田ら，2016）は公民的内容に焦点を当て比較考察した。考察の結果，２点，指摘できる。第一は，内容選択，第二は，配列順序である。第一の内容の選択に関して，通常学校用教科書が政治的・経済的視点を主な視点として社会を捉えようとしている一方で，本教科書は生活を中心として社会を捉える内容となっている。第二の内容の配列順序に関して，通常学校用教科書は，生活，政治，経済，国際関係という順

序で内容が配列されているが，本教科書は，きまり，生活，経済，という順序になっている。

本教科書で「社会を理解」し，「社会生活に必要な能力」を育成するために，きまり，生活，経済の三つの領域を学習する。なかでも，たとえば，税金や地方公共団体のルールやしくみについては，学校を卒業したのち，社会人として生活していくことを想定した学習内容が含まれ，生きるために必要な学習内容を選択している。配列においても社会生活を送る上での重要性という観点から，政治（きまり・しくみ），生活，経済という配列順序になっているのである。また，本教科書の「きまり・しくみ」の捉え方（学習者に習得させたい捉え方）は，通常学校用教科書の「きまり・しくみ」の捉え方と異なっている。具体的には，本教科書はきまり・しくみを所与のものとして扱い，いわば社会適応的に理解することを求めている。本教科書は「社会生活に必要な能力」のうち最低限必要な能力として，社会に適応する能力があると想定しているのであろう。学習困難という視点で言い換えれば，本教科書は，最初からきまりを改変可能なものとして捉えるというのは高いレベルの理解であるということであろう。一旦は所与のものとしてきまりを理解し，そのうえで改変可能であるということを学ぶという順序を想定していると考えられる。

小単元構成での相違でも同じことが指摘できる。内容の選択では，通常学校用教科書では，政府の経済活動から学習が始まり，世界という視点から日本経済を見ていくという学習まで行っていく。巨視的視点で経済を見ていく学習である。一方，本教科書では，「くらしを支える」制度として，「税金」「社会保障」「社会福祉」の三つの柱から説明を行っている。内容の身近さに関してでは，両教科書とも「私たちの（わたしたちの）くらし」という言葉を用いてはいる。しかし通常学校用教科書の意味する「くらし」よりも，本教科書の意味する「くらし」はより身近な「くらし」という意味を表しているのではないかと考えられる。すなわち，より生活に密着した内容を取り上げているというところに本教科書の特徴がある。

このような考察結果から，本教科書では巨視的視点で物事を見るということを学習困難と想定していると考えられる。税の取り扱いに関して，通常学校用教科書では，租税は「政府の経済活動と租税」の領域で政府の経済活動としての財政との関連で扱われるために，累進課税などを内容に含んでいる。一方，本教科書では,「私たちのくらし」を支えるしくみとして「税金」を扱っているため，社会保障と並んで小単元の一部を構成し,内容も,種類と使われ方を学ぶものとなっている。ここで想定されている学習困難は，一つの図に多くの情報を含めてしまうとつまずきやすくなってしまうということである。それを克服するための手立てとして，本教科書では，微視的，生活中心，情報の重点化という工夫がなされているのである。

公民的内容に関する比較分析の結果にもとづき，研究仮説と設定した四つの特性に関して，本教科書が準備していることとして，次のようなことを明らかにした。容易性の観点に関して，学習に見通しを立てること，具体的なイメージ，表や図で示していることで，内容の理解を容易にしている。決断性の観点に関して，学習の見通しを容易にすることにより，学習の具体的な行為を提示し，行為随伴性に関して，制度や仕組みが目的を持ったものと理解しそれを進めることとしていたのである。独立性に関しては特段の結果を取り出すことができなかった。

以上のように,本教科書と通常学校用教科書とでは,目標が異なっているために内容や方法の設計論も異なったものになっている。学習対象である社会に対してどのようなアプローチをとるか，という点で本教科書は，社会を受容すべきものとして捉え実生活に役立つ内容を取り入れ，教授よりも学習に重点化した構成となっている点で通常学校用教科書とは異なっている。本教科書の特質として特筆すべきことは，現代社会を生きるために必要な内容を選択し，その観点からの重要性に基づいて配列している点である。それは社会科が生きるのに役立つ教科であるという理念が反映されているからであろう。

２．結果の議論

第１稿から第４稿まで進めてきた比較分析とその結果考察は以上のようにまとめられる。特別支援学校用本教科書を通常学校用教科書と比較して見い出した社会科学習の困難とそれを克服する手立てに関しては，地理，歴史，公民的内容という３つの内容の分析を総括すると，次の２点を解明した。

(1) 学問との連関を重視した内容の学習は困難であるため，生活との関連を重視していること。
(2) 学問的に有用とされるものを生活にとっての有用性で学習させること。

学習困難の発見から探り当てた結果は，次の４つに集

約される。

(1) 社会の学習に関する目標，内容，方法の設計（デザイン）における設計論のちがい。社会の何かをわかることか，その社会を利用・活用し，自分たちにとって便利なものにすることかなどの社会の学習に関する考え方の違いを見えるようにしていること。
(2) 社会の学習の在り方に注意を払っていること。「学習（study）」は，教授と学習の両面をもち，いずれの側に重点化しているのかに関して，通常学校用教科書は教授に，特別支援学校用教科書は学習に重点化していると仮定できること。
(3) その際，特別支援学校用教科書は，何を教える，学ぶかということだけではなく，どのように教え，そして生徒が学ぶかという点に配慮していること，つまり，配慮していることに困難を想定していること。
(4) 困難には，教える側の困難と学ぶ側の困難がある。特別支援学校用教科書は，この２つの困難を想定し，作成していること。

Ⅲ．本研究の結論

一連の本研究から導き出される結論は，次の３点に要約することができる。

①特別支援学校用社会科教科書は教育や社会科の考えにもとづき，学問よりも生活との関連，生徒が社会において行き抜くために役立つこと，生徒と社会との関わりを内容選択・配列，また教授・学習の重点として採用していること。
②本教科書は学習困難を生徒の社会（地理，歴史，公民）の学習に対する生徒の困難として考えていること。
③また，とりわけ，社会生活との関連を重視し，学習困難を極力生みださない配慮をしていることである。

通常学校用社会科教科書との比較の結果，特別支援学校用社会科教科書におけるこれらの配慮は，４つの仮説との関連では，情報処理の容易性，情報の特定的な見えへの限定という決断性，動き，動作，行為を伴う行為随伴性によって学習困難を乗り切り，社会の学習が生徒の社会との関わりとして成果を生み出すものとして設計されている。その結論から引き出せることは，特別支援学校用社会科教科書は社会の学習に関して，社会生活との関わりによって，従来の通常学校用社会科教科書が含み持つ社会の学習において生ずる学習困難を避け，一人ひとりの生徒が学び取るものを確保している，ということである。

一連の本研究が目指してきた学習困難の研究に対する示唆で，本研究の締めくくりとしたい。

学習困難の視点として指摘できるのが，学習科学研究から導出した①容易性，②決断性，③行為随伴性，④独立性であった。この視点に関して考察した結果，特別支援学校用社会科教科書は容易性，決断性，行為随伴性を考慮し，その困難とそれへの対応（手立て）を準備していた。しかし，独立性に関しては注して，配慮をしていないというものである。その理由は，社会の学習においては，情報を個別に取り出すことよりも，固まりとして集合的・集団的に取り扱うことの方が学習の有益性を高めると考えていると推察される。

以上の結論は，特別支援教育で使用される社会科教科書に認められる結論であるが，しかし，特別支援教育のみ求められることではなく，「誰もがわかる，誰もが学ぶことができる」教科教育を実現するためには，通常学校でも取り入れるべきことであると言えるだろう。

註

1）大南英明編集代表（2013）『くらしに役立つ　社会』東洋館出版社.
2）Daniel L. Schwarz and Julie Heiser（2009）「学びにおける空間表象とイメージ」R.K. ソーヤー編（森敏昭・秋田喜代美監訳）『学習科学ハンドブック』培風閣，pp.222-224，226-230.

文　献

池野範男・宛彪・岡田了祐・渡邉巧・能見一修・横山千夏・若原崇史（2014）学習困難の研究（1）－特別支援教育の使命と教科教育の在り方－．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，12，17-24.
大南英明編集代表（2007）くらしに役立つ　社会．東洋館出版社.
岡田了祐・能見一修・若原崇史・宛彪・横山千夏・渡邉巧・池野範男（2016）特別支援学校用教科書『く

らしに役立つ　社会』の分析（Ⅲ）：公民的内容：学習困難の研究（4）．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，14，55-68.

五味文彦・戸波江二・戸ヶ崎典隆（2013）新しい社会公民．東京書籍.

五味文彦・戸波江二・戸ヶ崎典隆（2013）新しい社会地理．東京書籍.

五味文彦・戸波江二・戸ヶ崎典隆（2013）新しい社会歴史．東京書籍.

R. K. Sawyer (Ed.), *The Cambridge Handbook of the Learing Sciences*. Cambridge University Press, Cambridge．森敏昭・秋田喜代美監訳（2009）学習科学ハンドブック，培風館.

横山千夏・渡邉巧・能見一修・岡田了祐・若原崇史・宛彪・池野範男（2015）特別支援学校用教科書『くらしに役立つ 社会』の分析（Ⅱ）：歴史的内容：学習困難の研究（3）．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，13，7-39.

若原崇史・宛彪・横山千夏・渡邉巧・能見一修・岡田了祐・池野範男（2015）「特別支援学校用教科書『くらしに役立つ 社会』の分析（Ⅰ）：地理的内容：学習困難の研究（2）．広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要，13，11-25.

（2015. 12. 17受理）

An Analysis of the Textbook for Special Needs Schools "Useful for Everyday living" (IV): Research Summary and Discussion: A Study of Learning Difficulties Part 5

Norio IKENO
Graduate School of Education, Hiroshima University
Ryosuke OKADA
Graduate School of Education, Hiroshima University
Biao WAN
Student of Graduate School of Education, Hiroshima University
Takumi WATANABE
Student of Graduate School of Education, Hiroshima University
Takashi WAKAHARA
Mihara Third Junior High School,
Former student of Graduate School of Education, Hiroshima University
Chinatsu YOKOYAMA
Akenohoshi Junior High School and High School,
Former student of Graduate School of Education, Hiroshima University
Kazuyoshi NOMI
Former student of Graduate School of Education, Hiroshima University

This research is the preliminary study to aim at educational new creation especially which are the mission of the special support education, "everyone can know and everyone can learn." to restore an idea of the original education. In this research failure is in the educational state everyone has, not only the child who needs support especially. Our research team is thinking a possibility that all children fail and learning difficulty to have, supposes that it will be necessary to create the states that all children can learn without a trouble in a class and the activity of the school and push forward a study.

We in the first paper submitted some factors to produce learning difficulty as a hypothesis and examined the validity of their factors by comparing social studies textbooks for "special needs school" and the "usually" schools. In the previous three papers we compared course of study and social studies textbooks in two type schools and considered in the second, content of geography, in the third, content of history and in the fourth paper content of civics. In this fifth paper, we summarized our researches, generalized the purpose, the hypotheses, and the result of our research and considered the conclusion for the hypotheses.

In conclusion, we pointed out:

1: based on basic thought of education and social studies, the social studies textbook for special needs school is to choose and arrange contents and adopt the following as an important point; (1) connection with the life rather than connection with the discipline, (2) serving for students to survive by himself/herself, (3) connection with the life in the society.

2: it regards learning difficulties as the difficulty of the student for the learning of the society (geography, history and civics).

3: in particular, it makes much of the connection with the social life and does consideration not to produce learning difficulty of students as much as possible.

We examined these consideration in connection with four hypotheses so that:

(1) The social studies textbook for special needs school is to tide over the difficulty by easiness of the information processing, determinism called the limitation to specific view of the information, and perceptual action coupling;

(2) The textbook designs social learning as a thing bringing about result as the connection with the social life of the student.

We concluded that by the relation with the social life

(3) The textbook avoids learning difficulty that social studies textbooks for usual schools include in teaching and learning society and

(4) The textbook secures the results which each student learns.

Key word: the special needs school, subject pedagogy, social studies textbook, learning difficulty, helps and supports